



はじめに

こんにちは！私たちはA4高田ゼミ生物と人班です。

私たちは生物と人の関わりを様々な角度から調査しています。

私たちの活動が始まった2017年度から主に歴史に焦点を当て、調査してきました。「浮世絵生物図鑑」はその調査をまとめた一冊になっています。

この冊子を読んでより生物に興味を持っていただけたら嬉しいです。

～目次～

p.2	はじめに・目次	p.11	ウシ
p.3	ネズミ	p.12	ヘビ
p.4	ネコ	p.13	イヌ
p.5	トラ	p.14	サル
p.6	ヒツジ	p.15	ゾウ
p.7	スズメ	p.16	シカ
p.8	ニワトリ	p.17	ウマ
p.9	カラス	p.18	コイ
p.10	ウグイス	p.19	イノシシ

ネズミ

• ネコと一緒に...

大敵であるネコや、ネズミを従える神としても有名な「大黒天」とともに描かれることが多い。

• 十二支の子(ねずみ)

ある年の暮れ、神様が「元日の朝、新年の挨拶に一番早く来た者から十二番目の者までを、順にそれぞれ一年間、動物の大將にしてやろう」とお触れを出した。ネズミは、足が遅いからと早めに出発したウシの背中にこっそり乗って、神様の御殿の門の前まで来たところで飛び降り、ちょろちょろと走って一番になった。こうして、ネズミは十二支の最初の動物になったと言われている。

また、ネズミはネコに挨拶の日をわざと一日遅れで教えていたため、ネコは十二支に入らなかった。それを恨んで、今でもネズミを追い回すのだという民話もある。



『猫鼠合戦』

1859年・月岡芳年



『新板ねずみのたわむれ・下段図』

1882年・歌川国政

ネコ

・ ネコはいつから日本に？

ネコは奈良時代に仏教が伝来すると同時に、経典をネズミに食われないように中国から連れてこられた。

平安時代には貴重なペットだから逃げないようにと紐で繋いで飼っていたことが『源氏物語』に書かれている。

そして、江戸時代には庶民の家庭にもペットとして馴染んでおり、浮世絵にも多く描かれている。



『山海愛度図会 ヲゝいたい』

1852年・歌川国芳

・ ネコの絵がネズミ除け？

江戸時代ごろネズミ除けのために猫の絵が張られた。

米を買ったときにおまけとしてもらえることもあった。

・ 規制の際を突いて

歌川国芳の『猫の百面相』は、江戸時代、歌舞伎役者を浮世絵の題材とすることが禁じられたため、役者を猫に仮託して描いたもの。



『猫の百面相』

1842年・歌川国芳

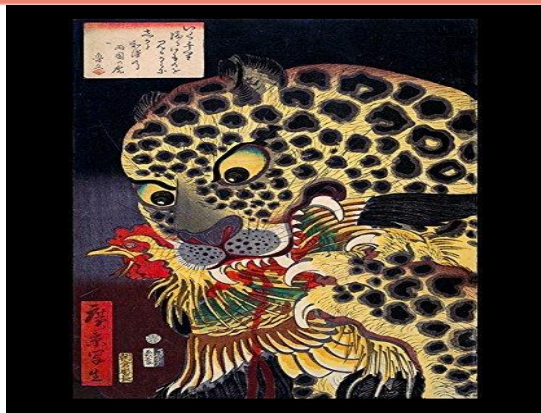
トラ

・力の象徴

中国においてトラは家畜や人を襲うことで知られる、恐怖の対象であると同時に、「力」の象徴である。そのトラを組み伏し打倒することはその人の力を象徴した。日本には生息しないが、浮世絵では朝鮮主出兵の際にトラを退治したとされる加藤清正や、中国・明時代の政治家をモデルとした和藤内がトラ退治をするものが有名。

・トラの骨は薬？

古くから虎骨はリウマチや神経痛に効くとして有名である。しかし、ライオンや狗でも代替はできるそう。なぜトラだけ有名なのか。恐らく、トラの皮といった嗜好品のために狩った際、骨にも価値があると考えたのだろう。「トラ」というブランドは人にとって根強いもののなのかもしれない。



「雄鶏を食べる虎」歌川広重



「和唐内虎退治」作者不明

ヒツジ

・ 定着しなかったヒツジ

日本においてヒツジは、十二支としての文言には溶け込んでいたが、人々にとって親しみのない動物だった。

日本の国土が狭く、放牧地が十分に得られなかったこと、高温多湿な気候が飼育に適さなかったこと、牛肉と比べて臭いがきつく、味が劣ったことなどがその理由として挙げられる。

・ 日本への導入

導入の歴史は古く、『日本書紀』に百済からの献上の記録がある。その後、欽明天皇の時代になって羊毛が初めて用いられたが、上記のような理由もあり、日本になかなか馴染むことはなかった。



『梅下の羊』北溪



『魯西亞人飼羅紗羊之図』
五雲亭貞秀

スズメ

・焼き鳥の始まり！？

江戸時代、農家にとってスズメは稲穂を食べてしまう害鳥だと思われていたことからスズメを丸焼きにして食べるようになったそうです。それが「焼き鳥」の始まりだと言われています。現在でも、五穀豊穡の神を祀る京都の稲荷伏見にはスズメ焼を提供するお店がある。

・浮世絵「雪中椿に雀」

スズメは欧州からアジアにかけて広くて分布し、日本で最も庶民に親しまれた鳥のひとつです。歌川広重が描いた浮世絵では庭で見られる風景を絵にしたような一枚です。



歌川広重「雪中花に雀」

ニワトリ

・鶏図を得意とした

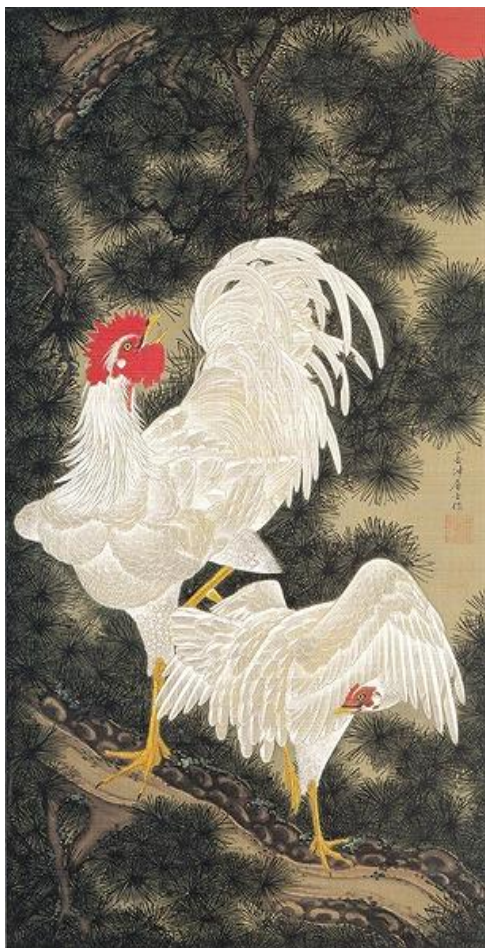
伊藤若冲

近年ブームが起きている江戸時代の絵師、伊藤若冲は鶏の絵を得意とした。中でも、「老松白鶏図」はニワトリに良い意味が込められた作品である。鶏は朝日が昇ると同時にいち早く啼くため、「誰よりも先に悟りを開く存在」という禅的な意味が込められている。

・十二支の酉

= 「ニワトリ」

十二支の「酉」は果実が成熟した状態を意味する字で鳥の意味はない。しかし、後に覚え易くするために酉は「ニワトリ」が当てられるようになった。はっきりとした理由は不明だが、家畜として身近な存在であったためだと考えられる。



伊藤若冲「老松白鶏図」

カラス

・カラスは幸運のサイン？！

真っ黒な体と不気味な声で害鳥とされるカラス。昔から「黒」という色自体が「死」や「不吉」という名持前の通りの暗いイメージを持ちやすい色であることから、カラスは「不吉なイメージ」がついてしまいました。しかし、実は「神の使い」として幸運を呼ぶぞんざいのほうが正しいのです。

・カラスはいつから嫌われた？

元々日本の喪服は「白」でした。明治の終わりごろまでは「白い喪服」が普通でした。それが、明治天皇の崩御に際し、列強に笑われないように「黒の礼服を着るように」とのお触れをきっかけに黒の喪服が急速に定着しました。それと同時にカラスが嫌われ者とされ始めたのです。



『枯木寒鳥図』河鍋暁斎

ウグイス

・春を告げる鳥ウグイス

ウグイスは全国に生息し、「ホーホケキョ」と鳴くことで知られています。早春に鳴くことから春告鳥とも呼ばれます。ウグイスは万葉集の中でホトトギスの次に多く詠まれた鳥です。それほど昔から人々に親しまれていた鳥であることが分かります。春の鳥であることから、「春」「梅」と一緒に詠まれることが多いです。

「梅に鶯」という組み合わせは、万葉集の歌に始まり、歌川広重が描いた浮世絵や花札にも使われている。



歌川広重「梅に鶯」

ウシ

・ 最大級！家畜の代表格

世界中に普及している家畜の中でも大きな体と角が特徴的なウシ。浮世絵の世界でも、家畜の代表として描かれることが多い。中でもウシに乗って笛を吹く童の浮世絵を多く見かけた。この子供はウシの誘導や世話をする牛童というらしいが、当時はこのような光景が親しまれていたのだろうか

・ ウシは神様！？

家畜は多くいれども、神の乗り物であるとして大規模な信仰を得ているのはウシしかないだろう。理由としては、機械のない時代において農耕や運び屋として役立ち、その上殺さなくても乳が食料として手に入るなど、ただ食べるよりも生かす方が有益だったからだと考えられる。



「横笛を吹く金太郎」 作者不明



「教導立志基」 荻生惣右衛門
小林清親

ヘビ

<信仰の対象>

昔からヘビは神の象徴として崇められていた。

Ex) お正月の鏡餅

→本来は「蛇身餅」といいヘビがとぐろを巻いた様子を模したものだっただ。

<なぜ信仰されてきたか>

- ・脱皮して若返る（ように見える）、強い生命力がある

⇒生と死を超越した存在

- ・水陸、木の上にまで素早く移動することが出来る

⇒あの世とこの世の往来さえ可能

- ・強い毒を持つ一方で薬としても用いられた

⇒生命、医学、薬学の象徴



△ 歌舞伎「蛇柳」

イヌ

● 日本と犬の関係の始まり は縄文時代から！？

全国の縄文遺跡からは度々イヌの骨が出土しており、犬は縄文時代から飼われていたことがわかっています。また、稲作が伝わってきた弥生時代にはイヌを食べる食習慣も伝わり、食料にされていました。

● ことわざ”犬猿の仲”の由来は「干支」！？

『犬猿の仲』は仲の悪いことのたとえとして使われることわざです。由来は諸説ありますが、「干支」の物語が関係あるという説が強く、十二支を決める際、神様の前に犬と猿はケンカをしながら現れたと言われています。それを見かねた神様は仲裁をするために犬と猿の間に酉（トリ）を入れ、9番目に申（サル）、11番目に戌（イヌ）の順になったとか。

● 犬の作品

①歌川国芳『武勇見立十二支・畑六良左エ門』

1840年頃の作品。南北朝時代以降には軍用犬として犬を活用する武将も現れ、江戸時代に歌川国芳が干支の動物と縁の深い歴史上の人物を浮世絵に描いた『武勇見立十二支』にて戌年に畑時能と愛犬が描かれました。



（山口県立萩美術館・浦上記念館所蔵）

サル

●猿は馬を守る神様？

サルはウマを守るという
われ廐（うまや）の守護
神と考えられていまし
奈良時代に中国から日本
に伝承した『猿芸』は、
武家での廐舎の厄除けと
して重宝され、現在でも
サルが存在する多くのア
ジアの国では比較的親
しまれ、敬われてる存在
です。

●物語のなかでの猿とは？

知能が高いことから、
利口で勇敢というイメー
ジから中国の『西遊記』
の孫悟空は正義の味方・
英雄として親しまれてい
ます。一方で、悪賢いと
いうイメージも持たれ日
本昔ばなしの『さるかに
合戦』では力ニを騙した
サルは結局、力ニの子供
達に仕返しされ懲らしま
す。姿が描かれています。

●猿の作品

①歌川広重「桜に猿」

江戸時代に描かれた作
品で、紐に繋がれ衣装を
着せられて描かれてい
る猿のサルが描かれてい
ることも『紅葉に猿』とい
う作品もあり、江戸時代
には猿芸がよく行われて
いたことがわかります。



<http://mfas3.s3.amazonaws.com/objects/SC139487.jpg>

ゾウ

・珍獣参上

日本に生きたゾウがやって来た最古の記録は、**1408年**で、ゾウは足利義持に献じられたと言われる。

江戸期、**1728年6月7日**にも、**8代将軍・徳川吉宗**の依頼で、**広南（ベトナム）**から雄と雌のゾウが渡来し、江戸市中は大賑わいだった。

・象牙の加工

江戸時代から明治時代にかけては、象牙を輸入し、根付や印籠などの象牙工芸が発展した。

ワシントン条約により、**1989年**以降象牙の貿易は禁止されている。



『二十四孝童子鑑 大舜』
天保末-弘化初期・歌川国芳



『新渡大象図』
1863年・歌川芳豊

シカ

<人間とシカ>

昔から食用や、角を漢方薬として利用していた。

また、農作物を食害する、食性を破壊する害獣とされることもある。

日本においても縄文時代からシカは狩猟対象であり、シカという言葉の語源は肉を意味する「シ（シシ）」と毛皮を意味する「カ」が合わさった言葉だと考えられている。

また、秋の季語で和歌に用いられたり、花札に紅葉と共にシカが描かれている。

現在の日本におけるシカのイメージは奈良公園や宮島を自由に歩き回っているものが多いが、昔も今もシカは日本人にとって非常に近い距離で存在している。



▲ 花札「紅葉に鹿」

紅葉の木の側で雌鹿を恋慕って鳴いている雄鹿が描かれている。鹿は結束力が強い為この絵には男女の仲の開運の願いが込められている。

ウマ

<人間との関わり>

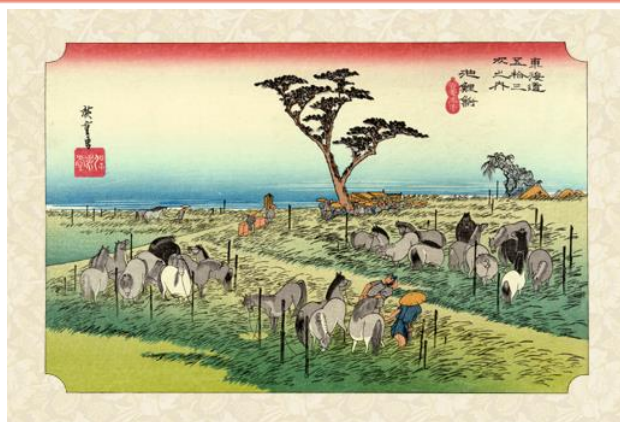
- ・約5000年前食料として狩猟の対象から家畜化
- ・速く走る能力や持久力に着目し、輸送・移動の手段として利用

→大量の物資を遠くまで運搬すること、荒れ地の開拓、広い農地の耕作が可能になる

- ・現代では乗馬、農耕用、交通手段、競馬、スポーツ用など用途ごとに改良され約200種類を超える

<日本の馬>

日本在来馬は現在8種類いるが個体数が少なく絶滅が危ぶまれている。在来馬の原郷はモンゴル高原とされていて古墳時代に家畜馬としてモンゴルから朝鮮半島を経由して九州に入ってきたとされている。古墳時代は小型馬が主流だったが、明治時代以降軍馬増強のため大型化が行われた。



▲ 東海道五十三次「池鯉鮒宿」

東海道五十三次の39番目の宿場馬市が立ったことで知られており、毎年首夏、陰暦4月25日～5月5日ごろに開かれていた。また三河地方の特産品であった木綿市も開かれていた。

コイ

・コイは食用だった！

コイは淡水魚として江戸時代に使われた魚類の中で一、二位を争う魚であった。コイには利尿作用があり、むくみや黄疸などに利くといわれていたそう。調理法としては洗い、コイこく、汁物などがあった。将軍様に提供されていたほど高級食材であった。



「水道橋駿河台」歌川広重

・鯉のぼりはなぜ始まった？

鯉のぼりは江戸時代の中
期から見られるようになった。中国の伝説によると黄河の激流を登りきったコイは竜になるといわれていた。そのため、男の子の成長と出世を願う端午の節句に鯉のぼり飾るようになった。



「鯉の滝登り図」葵岡北溪

イノシシ

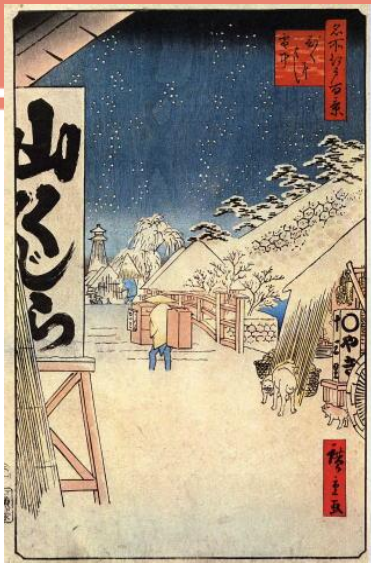
<日本人との関係>

- ・縄文時代から狩猟対象獣だった

- ・多産であることから、豊穰の象徴とされたり、【摩利支天】として大切にされ、縁起のいい動物だと考えられていた

- ・日本で獣肉食が禁忌されていた時代も、山間部などでは肉の食感が鯨に似ていることから「山くじら」と呼ばれ食されてきた。また、「薬喰い」とも呼ばれており、滋養強壯の食材とされてきた

- ・近年人里に出没することが多く、農林業被害や生活環境被害、噛みつき・突進による人的被害をもたらす害獣とされている



▲ 歌川広重「びくにはし雪中」

- ・比丘尼橋は外堀から京橋川が流れだすところにかかった橋
- ・雪が降り積もる町の厳しい寒さと、身体を温める「山くじら」（猪鍋）の店の看板がある



▲ 花札「萩と猪」

楽しんでいただけましたか？

